か わ ら 版

（創刊号） 2011/07/01 発行

年二回発行（1・7 月）

下関市立大学落語研究会 OB 会発行
電子版の扱いですので購読のためにはメールアドレスが必要となります。
編集長　　西川　隆喜

先の東日本大震災でお亡くなりになった皆さまに哀悼の誠を捧げますとともに、地震、津波、福島原発事故で被災生活を余儀なくされている皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

『かわら版創刊に寄せて!!』

下関市立大学落語研究会が創部された 1970 年（昭和 45 年）は、大阪万博が開催され日本経済はまだ右肩上がりの年でした。1960 年代末期の大学紛争は下火になり、いわゆるノンポリ学生が増えてきた時代でもありました。そんな中、学生マージャンの巣窟となっていた大学校門前の薄汚い安下宿で新入生 5 名によって落研は産声を上げたのでした。

それからは北九州大学、福岡教育大学、佐賀大学などに出向いては教えを乞い、学内では目立つのが一番と大学祭・馬関寄席、新入生歓迎寄席、納涼寄席、老人会慰問と数多くの落語会を積極的に開催し、最後は自らの追い出し寄席の高座に立ちました。以来、今年で創部 41 年目を迎えたわけですが、これも後輩諸氏の努力のお陰と感謝しております。

今年 2 月、落研 1 期生も還暦目前となったことから「市大落研創部 40 周年記念 OB 会」を企画したところ、各地から OB が集りました。参加者全員が 50 歳台後半といった面々でしたが、まさに大学時代にタイムスリップした楽しい一時を川棚温泉・お多福で過ごす事ができました。この記念 OB 会開催を契機に創刊することとなった「市大落研かわら版」が、OB、現役を問わず落語を縁に集った永遠の仲間の交流、情報交換の場として、今後継続的に発刊される事を切に願うものであります。

(大塚　秋夫-S49 年卒・　春好亭　金艶)

S49 年卒業の銀時計組の一人、落研の法の番人と言われた良識派。現在は千葉県柏市に住まわれ、ご家族は奥さんとお子さん二人の四人でわいわいがやがや暮らしておられます。実のところ最大の悩みは、早く子どもたちが結婚してほしいと願っている! 但し、家庭では物わかりのいいふりをひたすらしている腹黒いお方です。
(編集部)

『川棚温泉にて OB 会開催される!!』

6 月 11 日'(土)に下関市郊外の川棚温泉、旅館お多福にて OB 会が開催されました。今年は創部 40 年(実は 41 年)記念の懇親会と銘打って、神戸からは来賓として我らのオマリー先生(79 歳-：芸名　快楽亭英ホワイト)の参加も頂き、雨の中ではありましたが大いに親睦を深めることができました。最後は、参加者全員で『下関漁港節』を歌い、万歳三唱で閉会となりました。また、大学からは現会長の吉村直記君(3 年生;福井県立大野高校卒)によるクラブの活動報告が行われました。

<懇親会にて中央がオマリー先生>

翌日の 6 月 12 日(日)には吉村会長より、大学内にある落研の部室の見学会が催されました。卒業後はほとんどの OB は大学を訪問したことはありませんので、当時のプレハブの部室とは比較にならないほど美しい部室で驚きました。そこで我々は、現役時代に見なれた

高座名が壁に掛けられていることを発見しました。これには一同、極めて感慨深いものを感じた次第です。
（編集部）

<クラブハウス内の現在の部室壁面>

『古今亭志ん朝との連れション！！』

今は存在するかどうか解らないが、私が落研にいたころは公立学校共済組合の宿泊所「ひびき荘」が小倉城のそばにあり、そこで北九州落語長屋が主宰する落語会が年に二回ペースで開かれていました。当時は市大、福岡教育大学、北九州市立大学、門司高等看護学園の四学がその会のお世話をしていました。開演までの一通りの準備を済ませた私は手洗いに用を足しに行きました。何気なく私がふと隣を見ますと、何と若き志ん朝が用を済ましたところでした。そして、小粋な仕草で手を洗い日本手ぬぐいで手を拭きながら洗面所を出ていかれました。私は用を足しながら思いっきり首を曲げて志ん朝の所作を観察しながら見送っていました。あれからどれくらいの月日が流れたのだろうか?

志ん朝が亡くなって既に 10 年が経ち、あの『抜け雀』の絵師は今何処の宿場で絵を描いているのだろうか? 私と志ん朝の二人の秘密、それが思い出の連れションなのです。

（竹久　泰三 S52 卒・芸名　春好亭　遊狂）

岡山県の中央部に位置する勝田郡勝央町の農家の長男で、もちろん都会へは就職せず岡山県の職員となり現在は地元の小学校の事務をしながら、地元の女子プロサッカーチームのためにボランティアで練習場の整備をしている。昨年、前立腺の手術をし完治したので、健康診断を受け悪い病気は早期発見! を何度となく叫んでいた! 実母と奥さん息子さん三人の六人家族で、大学に通っている三男坊が卒業したら本当に高座名遊狂の本領発揮で遊び狂いだすのではないかと少し不安がある。そういえば、好志と私(朗志)の S52 卒組トリオの実家は全て農業をしていた! それから、ついでながら彼の妹さんは今や立派な経営者となっているそうだ。
(編集部)

『今の仕事と落研での経験 ！！』

落研での 4 年間は私のその後の人生を方向づけるひじょうに有意義な日々であったと思います。毎日が“激”で″濃”の連続でした。まず最初は入学したての新入生歓迎コンパ。場所はその後何度もお世話になる唐戸の養老の滝。初めて口にするビールや酒よりも衝撃的だったのは　先輩諸兄の豹変ぶりでした。

私が落研に入りたい入ろうと思ったのは高校の時からです。大学は下関市立大のみ受験。同じ学生生活送るなら有意義な日々をと思い、いつも東駅の歩道橋(今はありませんが)に寄席文字のポスターを見るにつけ「何か楽しそうに活発に活動しているサークルがあるんだぁ!」と思い、未知への世界の期待とほのかなあこがれを持って　入学してすぐに落研の部室を訪ねたのでした。

一番最初に尋ねられたのは朗志さんと好志さんから「実家は農家ですか？」との質問。それに「いいえ」と答えたときのお二人の落胆ぶりをみたとき(入部条件が実家が農家じゃないとダメなんだ～)とかなり落ち込みました。翌日は部長の笑仲氏とのお目通りがあり開口一番「うちは男子ばっかで女子はおらん。入部したけりゃ女をすてろ！」当時はまったく何のことかわからず、うなづくしかなかったのです。私は女子校でしたが、女子だけだったせいか女とか男とかまったく意識せずある意味のびのびと 18 歳まで生きてきました。当時市大は女子が 1 割しかおらず、大学に入ったとたん息苦しさを感じていました。落研のとびらを叩いたばっかりに私の棲息の場は【落研の部室】になってしまったのです。

今から思うと初代が土台を築いたものを、笑仲さんや晋平さんたちはどう構築し発展させていくか、組織作りに心血を注いでいたように思います。そこに能天気な(ブスで勉強しかしてなかったような)女子がきたので、まったく迷惑な話です。とにかく　みなさん厳しかった。わけわからんなりに厳しかった。

そんな折に新歓コンパです。度肝を抜かれました。春歌の応酬・・・もちろん初めて聞く歌ばっかりでしたが、意味もほとんどわからず(隠語のたぐいも、雰囲気で笑っていましたが理解不能！)　ビール瓶を小道具にして歌い踊り、朗志さんの手から離れたパセリが空を描いてテーブルの鍋の中におちたときはパセリのこんな使い方もあるんだ！と感心した次第です。極めつけは笑仲さんでした。(先日は川棚で再度拝見することができ、懐かしさのあまり思わず涙ぐんでしまいました。)あんなにきつく厳しいことばっかり言う人たちがよくぞここまではしゃぎ、おなかの皮がひきつるくらい笑い転げながらそれも間断なく、次から次に芸をだしてくることの人間性の深みというか厚さというか幅というか・・・もう衝撃そのものでした。その夜は生まれて初めての経験で一睡もできなかったのを覚えています。

とにかくメリハリをつけて、場所と時に応じてギアチェンジすること。いろいろなこと考えて方策は立てるが究極のところは楽観的に物事を考える。そんなことを　まず入学したてのころは、落研で学んだと思います。その後、馬関祭・模擬店・九落連・寄席・合宿・・それぞれの行事をこなすごとに得たものはあります。続きはまた次回に。

長々と記しました。読んでいただいてありがとうございました。また『かわら版』発刊に際し、当時を振り返ることができたこと心より感謝いたします。

(千葉里美　旧姓横山 S53 卒・花見亭たゆう)

〈好志（青山）さんたゆう（千葉）さんご苦労様でした〉

名門、下関南高校の出身で落研では初めての女性部員でした。大学の近くの垢田町から徒歩で通学しされていました。現在ご家族は御主人とお子さん二人の四人家族で長府市内のマリンホテルのそばにお住まいです。そして、どういうわけか我々が政治学を教えて頂いた山口大学の西村教授が仲人さんです!　ちなみに、垢田のご自宅は引き払いお母さんと妹さんは現在山口市でお暮らしです。（編集部）

『我が故郷と家族に乾杯!!』

我がふるさと黒井村に帰ってもう３０年になります。電気屋のおっちゃんとして地元に馴染み、長州の百姓としてのめりこんだ米作りも１８年。はじめは仕方なく趣味の域でいいやとやっていましたが地区農協の運営委員やら堤のの世話人やら段々と本格的になってきました。最新の農機具を使い、楽な作業をと考えてたら米は買ったほうが安い！でも自信を持って本物を作る。ストレス発散は近所のおじさんや友人たちとのゴルフ。そして家に帰ってからのかみさんと相変わらず焼酎のコップを手にしながらアルコールの飲める体でありたい、薬を飲むのはもっと後！と話すこの頃です。（韓流歴史ドラマを見ながら・・夫婦で少しはまってます）

かみさんは体型維持のためか太極拳（６年近くやってる）に励んでいます。長女は山口市

に嫁ぎ(我が孫は１人です)、息子は何の縁でしょうか我が母校市大の職員として勤務しております。８月に還暦を迎えるあばら家笑和の近況報告でした。
（尼子　和男 S49 卒・　あばら家　笑和）

『現クラブの紹介!!』

僕たち下関市立大学落語研究会は部員 26 名で活動しています。落語という日本の文化を学び、それを通して地域の皆様や他大学の学生さんたちとの交流を行っております。 また、部員同士の仲がとてもよく、落語以外にも多くの事に挑戦しております。
今年で 40 周年を迎えるそうなので、これからも頑張って行きたいと思います。目指せ 50 周年!!
(現下関市立大学落語研究会　会長　吉村　直記　3 年)

<一子相伝の”いやん! 馬鹿!”を指導する左から笑仲さん・受ける吉村君>

笑仲(森長)さんのほとんど神業というべき ”いやん! 馬鹿　! を必死に覚えようとする現会長吉村君との掛け合いが最高でした!
(編集部)

【編集後記】

１月末近くに東京の大塚先輩か自宅に電話があり、半ば強制的に幹事をやらされる羽目になった。気合いを入れて参加者の確保を行っていた矢先の 3/11 に東日本大震災とそれに連なる福島原発の惨事が発生しました。偶然テレビの中継を家内と見て、仙台空港沿いの道路をフルスピードで逃げる車があっという間に津波にさらわれてしまった光景はとてもこの世のものではないと感じた。そして、私は彼岸にご先祖様のお墓の前で何故か日本を救ってくださいと拝んでいる己に気が付きました。その後の OB 会への参加を求めるパワーのメルトダウンをもたらしてしたのも当然のことでした。

しかし、既に 6/11 の予約は確保していましたので結果として地元在住の青山さんや千葉さんの献身的な協力もあり無事開催し終えることができました。そして、これも何かのご縁と考え OB 会の残金 28,815 円は日本赤十字社へ寄付させていただきました。

一方、考えてみるとここ何年かの日本という国の政治、経済、防衛、外交、教育どの分野を取っても少し異常な状況におかれています。あるいは、追い込まれているといった言い方が正しいのかもしれません。そんな中で我々(落研創成期の私たち)と若い世代の OB、あるいは現役部員との情報交換や連携を少しでもできるのであれば、それはそれとして前向きな思考でありやっていこうということで今回の『かわら版』の発行となりました。まだまだお子さんの教育等でお金がかかり，OB 会どころでないという方たちも多いと思います。せめて、積極的に本紙に投稿してください。また、現役のクラブの方には『かわら版』を通して OB の思いを感じていただくことができればありがたいですし、寄席等のクラブの案内にかかる紙面を利用いただいても結構です。大変な時代に「ゆとり世代」として社会へ旅立とうとしているクラブの皆さんへ、困難な時代であるが故に一度は夢と志の違いを考えて頂くのも良いのではないでしょうか?　そんなあなたたちに最後に歌を一首、捧げます。

『日本より世界で一と歌われし　関の大志を世に示さんや』(2,289)